

源義仲の盛衰

- 一一五四 久寿元年 源義賢の次男として誕生。幼名は駒王丸。
- 一一五五 久寿二年 源義賢が甥の源義平（頼朝・義経の長兄）に武蔵国大倉館で討たれる。義仲は畠山重忠や斎藤実盛の尽力で信濃へ逃れ、乳母の夫の中原兼遠に養育される。
- 一一六六 仁安元年 京都の石清水八幡宮で元服する。
- 一一八〇 治承四年 九月、木曾で平家を討つべく挙兵する。
- 一一八一 養和元年 六月、義仲追討を命じられた越後の城助長が急逝する。
- 一一八二 寿永元年 九月、信濃の横田河原での合戦で城長茂を破る。
- 一一八三 寿永二年 三月、源頼朝と対立し信濃と越後の境で対陣、息子の義重（清水冠者）を人質として差し出す。
- 四月、平維盛ら十万余騎の義仲追討軍が都を出発する。
- 五月、越中の羽丹生八幡に平家追討の願書を奉納する。【木曾】
- 五月、越中と加賀の境の俱利伽羅谷での合戦で平家軍を破る。【実盛】
- 五月、平家軍は都に撤退する。
- 六月、近江に進出して延暦寺に牒状を送り、延暦寺を味方に付ける。
- 七月、平家は都落ちして九州へ向かう。
- 七月、後白河法皇を守護しつつ入京、都の人々に大歓迎される。
- 八月、左馬頭及び伊予守に任じられる。
- 閏十月、山陽道へ発向するが、叔父の源行家の讒奏の報せを受け帰京する。
- 十一月、後白河法皇の法住寺殿を攻撃し、法皇を幽閉する。院厩別当となり、多くの貴族を解官する。
- 十二月、平家に和睦の使者を派遣するが不調に終わる。
- 一一八四 元暦元年 一月、従四位、征夷大將軍となる。
- 一月、範頼軍・義経軍上洛に備えて宇治・勢多に兵を派遣する。
- 一月、義経は宇治川で義仲派遣軍を破り入京する。
- 一月、勢多へ向かい今井兼平とともに粟津で敗死する。【兼平・巴】

女武者・巴（ともえ）

生没年未詳。信濃国から木曾義仲に「便女」として伴われ、元暦元年（一一八四）正月の義仲最後の合戦にも活躍したが、義仲戦死以前に戦場を離れたという。この時、年齢は三十歳前後だったらしい。その実在を疑う説すらあるが、一方では義仲最期の語りを担う報道者であったと見、巴を名乗る回国巫女存在を想定する説もある。「便女」は「非上」のあて字であり、軍陣中にあつて武士の身の回りの世話をし、また戦闘にも参加した下級の侍女のことである。『源平闘諍録』には樋口次郎の女であり、母は義仲に召し使われた挿頭（かざし）という女性であったといい、後に鎌倉の和田義盛の妻

となつて朝夷奈三郎義秀を生んだとある。『源平盛衰記』は義仲の養親中三権頭兼遠の女とし、信濃国に残した家族に最期の様を報ぜよとの義仲の命をはたした後鎌倉に召喚されたが、和田義盛が乞うけて朝比奈三郎義秀を生ませたとする。建保元年（一二一三）の和田氏全滅後、越中の石黒氏を頼つて尼となり九十一歳まで生きたといい、一説には赤瀬の地頭のもとにいたとも記している。各地に巴塚と称するもの、あるいは晩年の巴が隠栖した地等の言い伝えが残っている。

（明治書院『平家物語研究事典』による）

義仲と巴の別れ

『平家物語』巻第九「木曾の最期」

木曾は信濃を出でしより、巴・山吹とて、二人の美女を具せられたり。山吹は勞りあつて都に留りぬ。中にも、巴は色白う髪長く、容顔まことに美麗なり。究竟の荒馬乗の悪所落し、弓矢打物取つては、いかなる鬼にも神にもあふと云ふ一人当千の兵なり。されば、軍と云ふ時は、札よき鎧着せ、強弓・大太刀持たせて、一方の大將に向けられるに、度々の高名肩を双ぶる者なし。されば、今度も、多くの者落ち失せ、討たれる中に、七騎が中までも、巴は討たれざりけり。……

そこを破つて行く程に、土肥次郎実平、二千余騎で支へたり。そこをも破つて行く程に、あそこにては四五百騎、ここにては二三百騎、百四五十騎、百騎ばかりが中を、駆け破り駆け破り行く程に、主従五騎にぞなりにける。五騎が中までも、巴は討たれざりけり。木曾殿、巴を召して、「己は女なれば、これよりとうとう何地へも落ちゆけ。義仲は討死をせんずるなり。若し人手にかからずば、自害をせんずれば、義仲が最後の軍に、女を具したりなど云はれん事、くちをしかるべし」と宣へども、なほ落ちも行かざりければ、余りに強う云はれ奉つて、「あはれ、好からう敵の出で来よかし。木曾殿に、最後の軍して見せ奉らん」とて、控へて敵を待つ所に、ここに武藏国の住人、御田八郎師重と云ふ大力の剛の者、三十騎ばかりで出で来る。巴その中へ破つて入り、先づ御田八郎におし並べ、むずと組んで引き落し、我が乗つたりける鞍の前輪に押し附けて、ちつとも動かさず、首ねぢ切つて捨てんげり。その後物の具脱ぎ棄て、東国の方へぞ落行きける。手塚の太郎討死す。手塚の別当落ちにけり。……

能へ巴へ

※現行観世流謡本による。「」は小段名。「」はコトバ。「」はフシ。

二番目物。五流の現行曲。作者不明。

前シテー里女

後シテー巴御前

ワキー旅僧

ワキツレー従僧（二〜三人）

アイー里人

第一段 ワキの登場 旅僧が木曾から琵琶湖畔の粟津へやって来る

「次第」 ワキ『行けば深山も麻裳よい、行けば深山も麻裳よい、木曾路の旅に出でうよ。』

「名ノリ」 ワキ「これは木曾の山家より出でたる僧にて候、我いまだ都を見ず候程に、この度思ひ立ち都に上り候

「上歌」 ワキ『旅衣、木曾の御坂を遙々と、思ひ立つ日も美濃尾張、定めぬ宿の暮毎に、夜を重ねつつ日を添へて、行けば程なく近江路や、鴉の海とはこれかとよ、鴉の海とはこれかとよ。』

「着キゼリフ」 ワキ「急ぎ候程に、江州粟津の原とやらんに着きて候、この所に暫く休らはばやと思ひ候

第二段 シテの登場 里女が神事に加わろうと姿を現す

「サシ」 シテ『面白や鴉の浦波静かなる、粟津の原の松蔭に、神を齋ふや祭事、げに神威も頼もしや。』

第三段 ワキ・シテの応対 里女は旅僧に義仲の弔いを勧める

「問答」 ワキ「不思議やなこれなる女性の神に参り、涙を流し給ふ事、返す返すも不審にこそ候へシテ「御僧はみづからが事を仰せ候か ワキ「さん候神に参り涙を流し給ふ事を不審申して候 シテ「おろかと不審し給ふや、伝へ聞く行教和尚は、宇佐八幡宮に詣で給ひ、一首の歌に曰く、『何事おはしますとは知らねども、「かだじけなさに涙こぼると、かやうに詠じ給ひしかば、神もあはれとや思し召されけん、御衣の袂に御影をうつし、それより都男山に誓ひを示し給ひ、『国土安全を守り給ふ、おろかと不審し給ふぞや

「掛ケ合」 ワキ『優しやな女性なれどもこの里の、都に近き住居とて、名にし負ひたる優しさよ シテ「さてさてお僧の住み給ふ、在所は何処の国やらん ワキ「これは信濃の国木曾の山家の者にて候シテ「木曾の山家の人ならば、粟津が原の神の御名を、問はずはいかで知り給ふべき、これこそ御身の住み給ふ、木曾義仲の御在所、同じく神と齋はれ給ふ、拝み給へや旅人よ ワキ『不思議やさては義仲の、神と現れこの所に、在し給ふはありがたさよと、神前に向ひ手を合はせ

「上歌」 地『古の、これこそ君よ名は今も、これこそ君よ名は今も、有明月の義仲の、仏と現じ神となり、世を守り給へる、誓ひぞありがたかりける、旅人も一樹の蔭、他生の縁と思し召し、この松が根に旅居し、夜もすがら経を誦誦して、五衰を慰め給ふべし、ありがたき値遇かな、げにありがたき値遇かな。』

第四段 シテの中入 里女は自分が霊であることをほめかして姿を消す

「歌」 地『さるほどに、暮れて行く日も山の端に、入相の鐘の音の、浦曲の波に響きつつ、いづれも物凄き折節に、我も亡者の来りたり、その名を何れとも、知らずはこの里人に、問はせ給へと夕暮の、草のはつかに入りにつけり、草のはつかに入りにつけり。』

第五段 アイの物語 里人は義仲最期の有様を旅僧に語って聞かせる

第六段 ワキの待受 旅僧は義仲の弔いを続ける

「上歌」 ワキ『露を片敷く草枕、露を片敷く草枕、日も暮れ夜にもなりしかば、粟津が原のあはれ世の、亡き影いざや弔はん、亡き影いざや弔はん。』

第七段 後シテの登場 巴御前の霊が弔いに感謝しつつ姿を現す

〔サシ〕 シテ『落花空しきを知る、流水心無うして自づから、澄める心はたらちねの。』

〔ノリ地〕 地『罪も報いも因果の苦しみ、今は浮かまん御法の功力に、草木国土も成仏なれば、況んや生ある直道の弔ひ、かれこれ何れも頼もしや頼もしや、あらありがたや。』

第八段 ワキ・シテの応対 巴御前の霊は義仲の最期に御供できなかったことを恨む

〔掛合〕 ワキ『不思議やな粟津が原の草枕を、見ればありつる女性なるが、甲冑を帯する不思議さよ シテ「なかなか巴と云ひし女武者、女とて御最期に、召し具せざりしその憾み ワキ『執心残つて今までも シテ『君辺に仕へ申せども ワキ『憾みは尚も シテ『荒磯海の』

〔上歌〕 地『粟津の汀にて、波の討死末までも、御供申すべかりしを、女とて御最期に、捨てられ参らせし怨めしや、身は報恩の為、命は義による理、誰か白真弓取の身の、最期に臨んで後名を、惜しまぬ者やある。』

第九段 シテの物語 巴御前の霊は義仲軍での自分の活躍を語る

〔クセ〕 地『さても義仲の、信濃を出でさせ給ひしは、五万余騎の御勢、鑣を並べ攻め上る、礪波山や俱利伽羅志保の合戦に於いても、分捕功名のその数、誰に面を越され、誰に劣る振舞のなき世語に、名をし思ふ心かな シテ『されども時刻の到来 地『運槻弓の引く方も、なぎさに寄する粟津野の、草の露霜と消え給ふ、所は此処ぞお僧達、同所の人なれば、順縁に弔はせ給へや。』

第十段 シテの物語・結末 巴御前の霊は義仲最期の様子を語って自分の弔いも頼む

〔ロンギ〕 地『さてこの原の合戦にて、討たれ給ひし義仲の、最期を語りおはしませ』

〔中ノリ地〕 シテ『頃は睦月の空なれば 地『雪はむら消えに残るをただ通路と汀をさして、駒をしるべに落ち給ふが、薄氷の深田に駆け込み弓手も馬手も、鎧は沈んで、下り立たん便もなくて、手綱に縋つて鞭を打てども、退く方も渚の浜なり前後を忘れて控へ給へり、こは如何に浅ましや』

〔歌〕 地『かかりし処にみづから駆け寄せて見奉れば、重手は負ひ給ひぬ、乗替に召させ参らせ、この松原に御供し、はや御自害候へ、巴も共と申せば、その時義仲の仰せには、汝は女なり、忍ぶ便もあるべし、これなる守小袖を、木曾に届けよこの旨を、背かば主従三世の契り絶え果て、永く不興と宣へば、巴はともかくも、涙に咽ぶばかりなり。』

〔中ノリ地〕 地『かくて御前を立ち上り、見れば敵の大勢、あれは巴か女武者、余すな洩らすなど、敵手繁く懸れば、今は退くとも遁るまじ、いで一戦嬉しやと、巴少しも騒がずわざと敵を近くなさんと、長刀ひきそばめ、少し恐るる気色なれば、敵は得たりと切つて懸れば長刀柄長くおつ取り延べて、四方を払う、八方払ひ、一所に当るを木の葉返し、嵐も落つるや花の滝波枕を畳んで戦ひければ、皆一方に、切り立てられて後も遙かに見えざりけり、後も遙かに見えざりけり。』

〔歌〕 シテ『今はこれまでなりと 地『立ち帰り我が君を、見たてまつれば傷はしや、はや御自害候ひて、この松が根に伏し給ひ、御枕のほどに御小袖、肌の守を置き給ふを、巴泣く泣く賜りて、死骸に御暇申しつつ、行けども悲しや行きやらぬ、君の名残を如何にせん、とは思へどもくれぐれの、御遺言の悲しさに、粟津の汀に立ち寄り、上帯切り、物具心しづかに脱ぎ置き、梨打烏帽子同じく、彼処に脱ぎ捨て、御小袖を引き被き、その際までの佩添の、小太刀を衣に引き隠し、所は此処ぞ近江なる、信楽笠を木曾の里に、涙と巴は唯一人、落ち行きし後めたさの、執心を弔ひて賜ひ給へ、執心を弔ひて賜ひ給へ。』